

被災地の声

～七尾市社協ではあの日/輪島市は今～

能登半島地震発生から1年、一歩ずつ復興が進んでいます。各地の社協では地域支え合いセンターなどが設置され、被害を受けた住民の方への相談支援・地域づくりが行われています。

今回は七尾市社協と輪島市社協の職員の方に、災害ボランティアセンター（以下、災害VC）立ちあげ当時の心境やこれからの展望を伺いました。



すすむ公費解体のようす(輪島市)



七尾市社協

あの日何があったか

七尾市社協では、発災後すぐに市民からの困りごと（ニーズ）の受付を開始し、1月末には災害VCを設置しました。

「他市の災害VCでの支援経験はあったが、自分たちで立ちあげるのはじめて。何から手を付けたら良いのかわからなくなっていた」と職員の間口卓也さんは当時を振り返ります。

七尾市では、1月に行政と水害を想定した訓練を予定しており、災害VCの設置場所や行政職員が災害VCに常駐することなどは取り決めていました。しかし、「被災地外から来る支

援者に何を頼むのか、どれくらいの規模・期間で災害VCを運営するのか、などの判断ははじめての経験で戸惑った」と谷口さんは語ります。

つながり、絆、ぬくもり

「近畿ブロックからの応援職員のみなさんが運営の基盤を作ってくれた。改善点も一緒に話し合いながら進めてくれたから6月末まで走りつづけることができた」と谷口さんは話します。

近畿ブロック内の社協では、石川県社協からの職員応援派遣要請を受け、1月25日から6月30日まで、延べ469名の職員を派遣。七尾市災害VCで運営支援を行いました。

「災害でたくさん辛い思いをしたし、失ったものもあった。しかし、全国の支援者との出会いや応援の声・失われた以上のつながりや絆ができた」と課長の直龍芳さんは言います。

七尾市では、一般ボランティアをはじめ、多くのNPO団体や青年会議所、イオンなど多くの企業や団体がともに、被災者支援にあたっています。中には、何度も来られた方もおり、人のぬくもりやつながりを感じることができたそうです。

七尾市では現在民間災害VC「おらっちゃ七尾」が災害関連の片付けや公費解体を待つ住宅の荷物だし作業を行っています。一般の方のボランティアも募集されています。

おらっちゃ七尾のHP



地域支え合いセンター

9月から「七尾市地域支え合いセンター」を立ちあげ、主に市内13カ所の仮設住宅で、見守りや住民同士の交流の促進などを行っています。仮設住宅の入居者は七尾市内だけでなく、奥能登地域からの避難者もいるため、初対面の住民も多くいます。職員は、被災者が安心して日常生活を営み、生活再建ができるよう、住民同士の顔の見える関係づくりや「ミニコミュニティ」を支援しています。

「寄り添う支援」とは、単にそばにいただけでなく、1人1人のスピードに合わせ、個々の事情に応じた支援を行うことが大事。また、被災者を支える支援者にも寄り添うことが必要だと思うこと直課長は言います。

今後も、七尾市社協は被災者・地域住民に寄り添いながら、復興を進めていきます。

●輪島市社協

癒えない気持ち

輪島市では、地震と水害、2度の大規模災害に見舞われました。復興に向けた活動の最中に発生したこの水害によって、気もちの整理がつかない方もいます。いまだに、水害の土砂災害により自宅に戻れない地域もあります。「正月をひとりで迎えるのが不安」といった被災者の声もあり、不安な気持ちを支えあう関係づくりが求められます。

輪島を知ってほしい

この状況に「負けたくない」と話すのは、輪島市社協の小谷 紘樹さん。小谷さん自身も地震で地域が孤立し、避難所から職場に通うといった厳しい状況

の中、通常業務と並行して、災害支援業務を行っています。

「全国から輪島市に駆けつけていただき、心から感謝している。いずれはボランティアや企業・団体などの外部支援がなくなるかもしれない。『地域の課題は地域の中で解決していかないとけない』という意識で、地元で協力していきたい」と小谷さんは言います。また、「ボランティアに限らず、観光等でも現地を訪れることにより、被災地の状況や住民の思いを多くの人に知ってほしい」と話します。

府社協は、今後も関係団体とともに七尾市・輪島市を含めた被災地支援に取り組んでいきます。

府社協は、堺市社協、大阪府市町村社協連合会とともに、12月6日から7日に輪島市へのボランティア・ワゴンを運行。町野町（輪島市）で河川の氾濫により畑を覆う流木や土砂を撤去する活動を行いました。依頼者は、野菜を育てるのが生きがいでしたが自宅や畑の惨状に、気力もなくなっていました。活動後の畑を見た時、「あきらめてたやけど、キレイにしてくれてありがたう。また、畑がんばります」と声を詰まらせていました。

地域で活躍する

民生委員・児童委員さん

NO.47

四條市 加治 治子さん
(民生委員歴2年)

地域で活躍する民生委員・児童委員(以下、民生委員)さんにスポットを当て、その方の思いを紹介します。

今回は、働きながら、里親活動も行う加治さんにインタビュー。活動で大切にしていること、今後の抱負について聞きました。

●地域の行事で民生委員へ

地域の行事「みそづくり」に参加していたところ、民生委員さんに高齢者サロンの手伝いに誘われ、そのまま民生委員に。就労していますが、在宅勤務で時間の調整がしやすいこと、遠方の母が民生委員にお世話になっていることもあり、お役に立てればと引き受けました。

●すぐにうごき、つなが

委員になって2年目で分からないことも多いですが、連絡が入れば、すぐに先輩委員に相談し、CSWや地域包括支援センター、行政等関係機関につなぎます。

日常のサポートを希望していた高齢夫婦はCSWに相談。しかし、介護認定が受けられず、制度が使えませんでした。そ

Q 質問数珠つなぎ

Vol.46 水野さんから質問

若い方に民生委員になってもらうには？

A 加治さんの回答

活動内容を検討し、働きながらでも活躍できることをPRする。

こで、民間の家事援助サービスをさがし、つながることができました。

●関係性ができるよろこび

サロンの案内を毎回届けているひとり暮らし高齢者の方が、何回訪問しても留守がつづき心配していました。するとご本人から、「入院後、家族のところにいる」という電話がかかってきました。自分の存在を気にしてくれたこと、関係性ができたことが本当にうれしかったです。

●「聴く」ことから始まる

高齢者調査や赤ちゃん訪問など地域の方にお会いできる機会や時間は、限られています。なるべくいい言葉で、誠実な対応をすることを心がけています。

里親活動でも大切にしていることは「聴く」こと。就労しながらなのですべての地域活動に参加できませんが、地域住民とのやりとりを大切に、じっくり「聴く」ことができる関係性をこれからもつっていききたいです。